☆帝国主義国、後進国、「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独一世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟

6月26日
週刊
第230号
編集発行人　馬場昇
一部　20円
購読料　20回500円（干共）

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2-7-6滝沢ビル内電話代表03(234)2961 振替 東京 21170
大阪支局大阪市都島区都島中通り3-7-16 電話 06(921)1457
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町128-29(075)(701)0025
名古屋支局 051 (921)6075

7月1日　反帝戦線愛知政治集会
（午後六時、場容会館）

7日　ロジャーズ訪日阻止闘争
（午後六時、日比谷野音）

七月全国反帝戦線結成大会へ組織総力戦を

6・23 世界革命戦争の七〇年代へ
反戦・全共闘五万七千が意志結集

七〇年6・23闘争。この闘いこそ、時確に「七〇年安保粉砕闘争」と呼んできた闘いから、内戦＝世界革命戦争として飛躍的に措定される七〇年代国際階級闘争へ向けて飛翔を開始する闘いの転換点にほかならない。しかし、そのような転換点を前に画した闘いは、実は六九年一〇・秋、とわけ昨秋安保決戦である。

われわれはこの過程で「党の革命」＝「過渡期世界における世界革命党」への理論的＝組織的飛躍が根本的につきつけられたのであった。それは第二次ブントの三分解から出発した六〇年代安保闘争＝階級闘争を対象化しつつ、レーニン・第三インターの継承、発展のうちに、その限界を止揚するものとしての自己の世界的党という課題への接近が開かれたことにほかならない。しかしながら第二次ブントは、その成立の当初的限界を突に揚しえぬまま、その作業は、赤軍派、情況・叛旗派との党内一分派闘争のうちにわれわれの前に課せられることになったのである。

この一年間のわれわれの苦闘とはまさに、そのような課題を果すべく第二次ブント再建の闘争にほかならなかったと、そのことが、今蜜闘争をして連続的な大衆的武装闘争をも包摂した帝国主義打倒闘争の創造＝復帰的武装闘争の地平を極めて不十分なものとしてあらしめたことを手順否定するものではなく、われわれは必ずや、今階級闘争に満ってきた「党の革命」への全内容の普遍化をなし遂げることによって、文字通りの反帝・反スターリン主義の党の創出をかちとるであろう。

最も密集し、意志統一された反帝戦線（6・23明治公園）

叛旗を粉砕情況は壊滅

そのようなわれわれの位置からして、六・三闘争の性格は、何よりも情況・叛旗派との党派闘争の質塵をおいてありえないものであった。この叛旗闘争総体を通じて、七中委一六・一四～一五闘争の案全な敗北にかかわらず、否、そうであるが故に、六・三闘争へ向けて獲後の悪あがきを試みることは明らかであった。

「党の革命」をこの問、その原動に担い切ってきた全国反帝戦線（社会党・社青同解放派）の六・三当日、正午より霞ヶ関厚生年金会館で結決起集会を開き、三時半に会場の明治公園に結集、一万数千人の大衆の意識水準をふるわしている。とはいうものの、やはり、六月闘争は一つの区切りをつけた。それはこのような区切りであろうが、六月闘争の大衆的高揚のなかで、七〇年代階級闘争の指揮部の非形成が大衆的に顕在化されたのであり、そのような意味での区切りなのである。

以上のことを六月闘争総体のなかで、われわれのみが、暫衆的派闘争の創出をめざしての党の革命を目らを党派へと組織すべく終行してきた。このことは疑がえなく大衆は六月闘争を自らを党派へと組織すべく終行してきた。このわれわれの闘いの中に内蔵が党の革命により、そのために、六月闘争といった大衆を止揚するものをも獲得することを要請するということ、それはまた決してあってはならないことだ、すなわち、われわれが、結集した衆に対して、

六月闘争の性格

全国の労働者・学生諸君！

七〇年六月闘争は、史上最大のデモンストレーションとして展開された。この大衆的高揚はさらに総体をより高次の段へ転化させる形態が与えられず、個々の分散したゲリラ的戦闘を含んだ戦闘的モとして終結した。だがこうした事態を六〇年安保闘争のアナロジーとして高揚から低滞局面への移行としてとらえることは決定的にあやまっている。

六〇年安保闘争以降の大衆闘争の低滞をもたらした諸要因は大衆闘争の力量をより固める権力の弾圧体制の強化というが共通の要因をそなえてはいるやが低迷していない。

第一に国際情勢は、六〇年安保闘争以降の大衆闘争が高揚へと転化する契機となった米帝の北爆とベトナム革命戦争の激化といった事態と国際的事態が、われわれの眼前にある。米帝のカンボジア侵攻とそれに対するインドシナ革命戦争の激化がそれである。

第二に国内政治の面からみれば

7月11・12日共青同、社学同全国合宿
7月24日新共青同結成大会
7月25・26日全国反帝戦線結成大会

六〇年安保闘争は、岸内閣による「所得倍増」政策をかかげ分裂へと揺動していった。だが、岸内閣からの「方向転換」を印象づけたのであるが、今日、佐藤政府が直面しているものは、七二年沖縄の段階的復帰基地化のステップにしたアジア侵略・反革命であり「福祉国家」の政策はもはや提起出来ないことである。

第三に労働者・学生大衆の状態である。六〇年において彼らに権力の弾圧に屈服したと同時に、自らの国家にした組織（安保共闘）そのものの解体をよって乗り越えられた。すなわち、当時に労働組合を母胎とした政治的統一戦線が、労働者大衆の基本的な闘争組織であったのである。だが今日統一戦線は幻想にすぎない。

闘争以降の低滞局面を、新たな闘争の胎動と転化する契機とするためには、六〇年安保闘争の内実に即してはすでに何度となく明らかにされてきた。その際、われわれの眼前にある。米帝のカンボジア侵攻とそれに対するインドシナ革命戦争の胎動がそれである。

第二に国内政治の面からみれば

六月闘争における党の革命を全戦線に押し拡げよ！

旗体が低滞局面における分派闘争と内閣に「所得倍増」政策をかかげ分裂へと揺動していった。だが、今日、他党派はともかく、われわれは、目前の闘争に自然発生的に突入してきたのではなく、意識的に闘いを設定しつつも、しかしながら、われわれの闘争に自然発生的に党派性が与えられ、六・三闘争へ向けて獲後の悪あがきを試みることは明らかであった。

「党の革命」をこの問、その原動に担い切ってきた全国反帝戦線（社会党・社青同解放派）の六・三当日、正午より霞ヶ関厚生年金会館で結決起集会を開き、三時半に会場の明治公園に結集、一万数千人の大衆の意識水準をふるわしている。とはいうものの、やはり、六月闘争は一つの区切りをつけた。それはこのような区切りであろうが、六月闘争の大衆的高揚のなかで、七〇年代階級闘争の指揮部の非形成が大衆的に顕在化されたのであり、そのような意味での区切りなのである。

以上のことを六月闘争総体のなかで、われわれのみが、暫衆的派闘争の創出をめざしての党の革命を目らを党派へと組織すべく終行してきた。このことは疑がえなく大衆は六月闘争を自らを党派へと組織すべく終行してきたことの正しさが確認されねばならない。

わが同盟の分派闘争の意義

党派闘争の全国的局面としての六月闘争において、情況・叛旗派との党派闘争が発生したこと、このことの意味を明確にするためには、六〇年安保闘争以来の、この闘争一年有余にわたるわれわれの党内闘争・党派闘争の全過程がふまえられねばならない。

第一に国際情勢は、六〇年安保闘争以降の大衆闘争が高揚へと転化する契機となった米帝の北爆とベトナム革命戦争の激化といった事態と国際的事態が、われわれの眼前にある。米帝のカンボジア侵攻とそれに対するインドシナ革命戦争の胎動がそれである。

第二に国内政治の面からみれば、六〇年安保闘争以降の大衆闘争の低滞をもたらした諸要因は大衆闘争の力量をより固める権力の弾圧体制の強化というが共通の要因をそなえてはいるやが低迷していない。

第一に国際情勢は

政治警察の組織破壊攻撃を粉砕せよ

「窃盗」事件フレームアップを粉砕し、軍建設の陣型強化を

共産主義者同盟関西地方委員会

全国の同志諸君！　戦旗読者諸君！

一年有余にわたって現代版政治警察＝公安調査庁との分派闘争＝党派闘争を闘う中で、彼らをわれわれ体内から生み出した胎さを完服し、かつ彼らを根底から止揚しうる陣型強化の第一歩を踏み出したわれわれは、更に今、昨秋安保決戦において敵線逃亡し、又、そうした分子と訣合せんとする党内右翼日和見主義者達を追い詰めて、70年代を貫く内乱の第一歩を促進し、革命的議会主義から内戦＝世界革命戦争という唯一正しい戦略を実現しうる党＝軍＝統一戦線の形成に着手してきた。

軍事を組織しうる党へと飛躍し、更に闘いつつある陣型強化の為には、この数カ月、われわれに集中的攻撃をかけ「BUND壊滅作戦」に狂奔している。たがわれわれは不死鳥であり、六月闘争を裏返した政治警察に対して、別稿に明白に闘い抜く中で、一層われわれの党を純化し、かつ主体を打ち固めつつあり、三三日、関西全体を震撼させた全機動隊の動員による「窃盗犯」の一斉検挙＝弾圧は、われわれの党の破壊を狙うと共に、かつ六月闘争の敗北の総括を党内外に対して強要する為に、われわれの戦略・戦術の転換を迫るものとして登場した。

弾圧の質的転換

昨秋決戦の総括と、すでに明かにした如く東大全共闘攻防戦から、昨年四・二八沖縄闘争で形成された機動隊の連隊化への再編成に基づく「治安維持体制」は、秋の安保決戦では一層強化され、現実に闘われた。昨秋安保決戦の中で、唯一、一切の武装闘争を断絶的な反革命政治警察の破壊の中で、一層その正しさが確認されてきているのであるが、このことを裏面から証明しているのが他ならぬ権力のわれわれへの弾圧の質的転換である。すなわち、昨秋決戦に先立つ東大全共闘攻防戦から、昨年四・二八沖縄闘争で形成された機動隊の連隊化への再編成に基づく「治安維持体制」は、秋の安保決戦では一層強化され、現実に闘われた。昨秋安保決戦の中で、唯一、一切の武装闘争を断絶的な反革命政治警察の破壊の中で、一層その正しさが確認されてきているのであるが、このことを裏面から証明しているのが他ならぬ権力のわれわれへの弾圧の質的転換である。

以来の弾圧についてはすでにわれわれが繰り返し主張し、精密化し、実践してきたのみならず、六月闘争における諸党派の破壊の中で、唯一この武装闘争を断絶的な反革命政治警察の破壊に対して、革命的議会主義＝統一戦線の形成と武装闘争＝戦略的内戦の準備を一体的に闘いぬいてきたことと、その政治の核心が帝国主義軍隊体制にあり、戦略の要が帝国主義軍隊の破壊＝解体にあることを、そして主体形成の要を階級的武装闘争における党＝軍＝統一戦線の構築として実践的に闘いぬいてきたことと、六月闘争における敵の戦略・情況の総括の基本的な骨格を与えるものである。

今回、政治警察のデッチ上げ弾圧に対し、断乎として反撃闘争を展開し、武装勢力を形成することを、全ての同志と共に確認した。こうした鉄火の武装闘争によってのみ、真の革命戦士が形成されるのである。だからこそ六月闘争からの武装闘争は、サン然としてあり、われわれは彼らと固く連帯し、支え、獄中、獄外で同志の闘いを鼓舞することを確信している。

最後に次回闘同志の軍中からの書簡の一部を引用しておく「一年間の労働者・学生を指導したことを誇言しておく。

七月の全国反帝戦線の大会に、同志諸君と再会できるのを楽しみに！

われわれは、必ずや敵百の部隊を形成して、反帝戦線の結成大会に臨むであろう。

いわゆるRG窃盗事件について

以上のような権力形態の転換、及び体制的再編とRUND壊滅方針という背景をふまえて、一四日未明から一斉に行われた「窃盗犯」の摘発＝弾圧は、一年間の各種検挙活動と、一二月頭の反RG・バ闘争にたいする「RG窃盗事件」をとらえなければならない。

"戦旗派の地下軍団"、"覆面で革命資金"、というマスコミ発出しで報道した読売新聞六月一五日号によると"赤軍派と並ぶ極左集団"とされた"戦旗派"の地下軍団は